

——ニコライという女騎士——

始めてサントペテルブルクの冬宮殿に訪れた時、青空の下に唯一構える雄大なる姿に思わず息を飲んだ。細やかさで美しさを模った装飾に目を奪われ、規則正しく綺麗に準えた外の風景と相反する、優雅で官能的な雰囲気を持つ芸術の祭典とも呼べる内部のデザインを俺は決して忘れまい。

しかし

「しかし、だ」

ここはお世辞でしか美しいと言えない様な掃き溜めだった。

貴族は常に自分より権力ある貴族に取り入ろうと必死になり、同郷の者も昨日までワイングラスを共に傾かせた人すらも平気で裏切りやがる。財力と特権を持つ貴族は立場を守る為に手回しし、下の者を更に貶めては自分と同じ立場の人間をまた顔色一つ変えず破滅させる事を常日頃考えて止まなかった。

元内和弘

出合う貴族全てに違う顔を見せ、違う言葉を交わし、しかしそのような貴族等は皆権力と金のみを瞳に映している。

正しく、宮殿は巨大に聳え立つ魂の墓場だった。

「ニコライ殿、今夜はその剣を降ろし、ワインでも如何ですか？」

「断らせて頂きます」

自分より影響力があるならばと食いついて来る連中が気に食わない。

「ニコライ侯、是非とも我が領地で行われるパーティーに、引いては公爵にお言葉を」

「断らせて頂きます」

同級だとすれば浅ましい笑顔を貼り付けて利用しに掛

かる連中も気に食わない。

「ニコライよ。そろそろ僕の息子と時間を持つてみるが良い」

「断らせて頂きます」

下の者は駒としか見ない視線が、何よりもまして気に食わない。

(気に食わない！)

父の死後、自然と受け継ぐ事になった騎士の爵位を持つて宮殿に来た。膨らんでいた思いからは嫌悪だけが流れ、理想は絶望に近い形で砕かれてしまったのである。

それでも未だ宮殿に残っているのは

「そうやって、折角の美人を辛気臭い顔で台無しにするでない。余の誇りである騎士ニコライよ」

ただ陛下がそれを望まれたからだだった。

エリザヴェート・ペトロブナ女帝陛下は誰よりも美しく、またある意味で宮殿の中で唯一権力等という営みから外れたお方だった。何より女性だった俺を、護衛として傍に置く事で何よりも嫌悪する営みからの自由を保証してくださった方でもある。

しかし始めてお目にかかった十年前とは違い、今や病いにおかされ一日の多くをベットから余り離れる事もできずにいらつしやるのが現状だ。

「申し訳ございません。決してこの時間に対しての物ではありませんでした」

「其方は色々抱えすぎなのだ。もう少し気を楽にして、たまにはめを外してみると良い」

現在では公爵様からの報告等を陛下に伝える、という役目もあるけれど実際の所は身の回りの世話をする侍女とそう変わらない。

「はめを外す、ですか」

「甘味を楽しんだり、動物を愛でたり、殿方と遊ぶもよし。そういう経験もまた大切よ」

「お言葉はありがたいのですが」

如何なる物も所詮気休めにしかなるまい。楽しめもしない物を所望するなど、陛下に取り入ろうとする連中と同じだ。

しかし俺のそんな態度にも女帝陛下は微笑むばかりだった。美しさはギリシヤの女神彫刻のようで、暖かなること母親の如く、声には安らぎあり、母なる大地を総べる優しさは尽きる事がない。

「良い良い。まだ探せぬなればそれも一興、風情のある悩みよ。それでも、うむ。お主のvarietyが楽しみだ」

エリザヴェート様はそうおっしゃってご就寝になった。俺は出来る限り静かに部屋を後にする。

「エリザヴェート陛下。それでも俺には何もかもが、あの場所じや色褪せて見えてしまうのです」

月が陰った日でも尚、ネヴァ川から反射される光は川辺を照らしてくれた。俺はロングソードを両手に、宙へ大きな半円を何度も何度も描く。何にも捕らわれず、ただ悩むだけの時間だった。

「何故陛下はそう堂々としていらっしゃる事ができる？」

全身が汗だらけになってようやく疲れ果てて剣を降ろすと、川の流れを伝って来た冷たい夜の風が額を一瞬で乾かしてしまう。

「俺は、どうしていけば良いのだ」

宮殿に来てからなめられる事のないように貴族としての役目は果してきた。他から決闘を申し込まれた事もあつた。それでも女帝陛下の側近として剣を持って制してきた。

しかし得たい物も、失いたくない物も、果したい目的もない。そんな俺が何処で何をしようと、そこに何の意味があるというのか。

もつと力のある者に媚び諂う事しかせぬ連中の作り笑いが浮かんできた。連中は皆醜くも己の求める何かに手を伸ばしていたのである。けれど俺は、俺はそんな醜さすらも持ち合わせる事が出来ない。

「何にも崇高さを持ってぬなら、俺はあの醜い連中と何が違う」

息を整えてようやく、後ろから芝生を踏みしめる足音を耳にできた。

「誰だ！」

振り返るとそこには綺麗なドレスを着込んだ女性が一人佇んでいた。明るく澄んだみ空色のドレスを後ろに束ねて膝下を晒し、首伝いに少し膨れた胸を隠すフリルの飾り。他の貴族同様額を晒して後ろに結んだ髪はチューリップで染めたようなくすんだ黄色をしている。

「怖いですわよ騎士様」

そんな見た目だけでは想像もつかない少年のように透明で澄んだ声と、逆に落ち着いている雰囲気には不思議な魅力を感じられた。陛下の侍女は皆貴族家計の娘さんだが、彼女は中でも特出している。

「申し訳ない。確か、レア・ド・ボモンだったか」

「レアで良いですわよ。騎士様はどこで何を？」

ドレスに汚れが一切なく、み空色に色褪せた部分もない。芝生を歩く時も音を立てない身だしなみは気品が滲み出ている。

「特には、寝つけなくて少し身体を動かしたけであります。それでは良い夜を」

「もう行くのですか？」

「ええ」

軽く水に浸した布で剣を拭き、さつさと宮殿に戻ろうと踵を返す。だが周りを見ても俺の持ってきた丸いワインボトルが見当たらなかった。

「うん。良いブドウ酒ですわね。」

気付けばいつの間にかレア殿が瓶の底を片手に、ブドウ酒の中身を空けていたのである。

「それは、幸いです。きっとワインも本望でしょう」

正直かなり驚いてしまった。宮廷は色々なマナーになり敵しい。その分に貴族共は内側はどうあれ、外側は礼儀礼節をちゃんと守るのが一般的だ。比べて彼女の行動は余りにも破格的だったのである。

「悔しくないのですか？ 折角のワインを」

「いえ、そのような事は決して」

勿論文句の一つはあつた。が、彼女は女帝陛下のお気に入りである。今後何度も顔を合わせる事になるのに、トラブルは避けたい。

「魂なき返答など、腰抜けなのですわね」

そう割り切ろうとしているとレア殿は唇の端を上げてこちらをあざ笑うようにして挑発してきた。

「それが誇りある騎士のあるべき姿なのですか？ 本当にそれで良いのですか？」

「一体何が言いたい」

睨みつけると彼女は背中からベルトと、鞆に収まったレイピアを見せつけてきた。何重に重なった曲線の護拳と細い刀身を持つそれは、殺傷能力の高い武器である。

「とても貴方に必要な物には見えないな」

「勝てば、女王様から授かった一番良いワインを謝罪と共に持ってきますわよ？」

何の冗談かと思っていたが、鞆からレイピアを抜いた

彼女の脚の運び方は尋常ではなかった。歩幅は狭くも剣の重さにふらつく事なく、握っている手からしつかりとした力が込められているのを見て取れる。

「侍女に必要な技術ではないと思うが？」

「必要かどうか、全ての価値判断の基準にはなりえないのではないのでしょうか？」

「それは、そうだな」

毎日のように剣を振る事、ありたい姿を見出そうとする事、きつとそれは必ず必要な物ではない。ただ宮殿に溶け込むという選択肢も、何もかもを返上して故郷に帰ってしまう選択肢も、貴族である俺には許されている。

「そちらが勝てば？」

「心配はいりません。不可能を語る程、わたくしは酔っていないのですから」

俺は十年以上剣と銃を鍛えてきた。将校ではなくこのロシアの騎士としてだ。だからこのプライドもある。

それ以上に幾ら陛下の侍女とは言え、その側近の護衛騎士がここまでバカにされて戦わなければ恥さらしだ。

「あんたが生半端な実力がない事を願う。でなければ女帝陛下の侍女を殺した人間になってしまうだろうからな！」

鞘に収めようとしたロングソードをそのまま両手に握って身体を投げた。大きく一步を詰めて先に相手の刀身をこちらの剣身ではねる。

剣先同士がぶつかった時、掌から全身に伝わる衝撃は凄まじい。それを利用し、左手で首根っこを掴んで制圧してやろうと思っていた。

それで十分だろうと、なめていたのだ。

「散々挑発しておいて何ですが、今のは想像以上に頭にくる物がありましたわ！」

彼女は全力で振った剣と剣がぶつかる瞬間に自ら手を放した。同時に半歩を詰めて、前のめりに身体を投げた俺の首筋と伸ばした左手を逆に掴みとる。気付けば地面から脚が離れ、代わりに背中を付けていた。勢いに加え、彼女の腰を軸に投げられた衝撃が全身に響く。

「ッ！」

自分が勝負に、あつけないくらいに容易く破れた事を知覚して最初に浮かんだのは悔しさではなく疑問だった。

「どう考えても、ただの侍女じゃないだろ」

俺が考えていた事を、そのまま逆利用されたのだ。未だ手から剣同士がぶつかった衝撃が抜けない。

目を隠すようにして、倒れていた俺を見下ろしてくる。

油断していたとはいえ、彼女の動きは脚の運びからタイミングに至るまで余りにも完璧で美しかった。

「いいえ、エカチエリーナ陛下の忠実な侍女ですわよ？」

おほほ

「嘘だ……」

俺の吹きを耳にすると、わざとらしくドレスを軽く持ち上げる。不思議と俺は目の前に佇む人が自分に嫌気がさしている事に感覚的に気付いてしまった。

(何故かは分からない。けれど何となく)

安心できる。同じ場所に生きるからか、それとも綺麗さっぱりと決闘に破れてしまったからか。

「レア・ド・ボモン、この借りはいつか必ず返す」

「だから、気軽にレアと呼んでくださって大丈夫ですよ？ キリル侯爵様」

「なめて掛かつては破れた。そんな状態で気軽にはできませんな」

「噂通り頑固ですわね」

彼女の手を握って地面から立ち上がる。もう剣を持つ

前のような複雑で振じられたような不快さは綺麗さっぱり晴れていた。雲が晴れたような気持ちだけが少しの鉄臭さと共に口の中に広がる。

しかし冷静になってみると驚きが薄れてゆき、悔しさだけが色鮮やかに浮上してきた。もしなめて掛からなかったらこんな結果にはなっていないかどうかは予想できる。

「もう一回だ。今のは綺麗な勝負とは言えない」

「見た目で騙してきたとでも仰るのですか？」

その場で軽やかなステップを踏んでドレスを見せびらかす動作は、流石バレーの本場フランスの人といった所だった。鍛えこまれた動は美しくしかし軸がぶれない。

「賭けはもうどうでも良い。ちゃんと本気で決着を付けねば納得がいかないんだ！」

「んん、確かにわたくしとしても手応えがないと言いますか。でも一樣騎士様に勝ったのは事実です。ここで辞めておいた方が得かなーとか、思っちゃいますけど？」

何と言うあからさまな態度なのだろうか。レアは横目に、わざとらしくレイピアを鞘に納めて背中を向けやがった。しかし俺は自分が騎士たりえるという事を、確かな誇りを抱いていると証明しなければいけない。

「フランス出身ならワインには定評があるだろう。ならば、ウォッカでどうぞだ！」

「先の勝負を含めて二本分ですわよ？」

「そうこなくちゃ！ 折角だからズボンを買ってやる。そのドレスじゃやりにくいであろう？」

「配慮ありがたく思いますが、これはわたくしの制服でございませう」

俺達は数十、数百回と疲れ果てるまでに我々が剣をぶつけた。それは子供の頃に戻ったようで、純粋な楽しさ

と心通わせている安心感を与えてくれる時間だった。

——レアという侍女——

「しかし、あの女。どう考えても侍女じゃないよね。どう思うブローシユ？」

「一晩過ぎて、あの清々しさは何処に行ったか、俺は嘔み砕けない疑問に苛まれていた。無論馬に聞いても何も答えちゃくれないが、それ程までに彼女の剣は素晴らしかったのである。」

「銃一発あれば全てを解決できる時代に、侍女さんがあれ程までに実力を付ける理由があるのか？」

「正直、そう、とても恥ずかしいが、俺の方が遅れをとっていた。実践でもなかったが、言い訳にはならん。」

「本当に、ただの侍女か？」

「宮殿内で陛下の隣にいと、色んな貴婦人の方々や侍女の皆と話す事が多い。彼女等の口数とお喋り量、そして情報量は凄まじいがレアに関しては記憶がないのだ。」

「馬の汗を払っていると、その黒い後ろ髪を大きな手が撫で降ろした。振り向けば伯爵様が自ら乾草を食わせている。」

「ブツブツと何を独りで喋っている？」

「伯爵様！ 何故？」

「我が我の馬と部下の様子を確かめるのに何か不満でもあるのか？」

「いえ決して」

「頭を下げていると手を休めるなど叩かれた。躓きそうになりながらも頭を振って馬の世話に戻る。」

「しかし何をそう悩んでいる？ お前がここまで近づいて気付けない等、何かあったのか？」

「そのような」

「お前の為聞くのではない。お前が呆けていては師匠である我が評判に響く」

「相談するような出来事でもない。のだが」

「それでも俺なんかよりは対外的な面に詳しいか」

「レア、レア・ド・ボモンという女帝陛下の侍女を、存知ですか？」

「知らない方が可笑しい話であろう。お前は夜会に参加しないから分からないかも知れないが、あの容姿だ。有名にもなる」

「確かにレアは美しかった。生まれ持つ顔もさることながら、貴婦人の使う良く分からない美容法よりも日頃の鍛錬から出る肉体美がドレスの下からでも感じられる。」

「うむ。確か、フランスの出身とか言っていたな。毛皮商人の娘だとか」

「他に変わった事はないんですか？」

「なんだ？ やけに興味津々ではないか。もしや惚れてしまったか？」

「冗談を。神に誓ってそのような事はありません」

「もし惚れたとすれば彼女の剣にだ。そもそも同性同士の営み等、どの国でもかつてから禁止されている。」

「神に誓うか、まあどうでも良いがな。しかし折角話して貰ってすまないが我もそう詳しくは知らん。身の振り方から見た所身分、若しくは育ちは良さそうだが、大人しい無口な美人だという以外の印象もないな」

「無口な美人？」

「何だ？ お前相手には違うのか？」

「頭の中ではレアの姿を思い出していた。月明かりの下で剣を手にしたドレス姿を、簡単に俺を投げやがった後見せた楽し気な澄まし顔を。少なくとも大人しかったり、無口といった印象は一切ない。」

「遠い国の社交界なのだ。そういう事もあるだろう。何にせよ好意を寄せられるのは悪い事ではない。油断はならぬ事だがな」

「伯爵様は乾草を餌箱に入れて溜息を吐いた。それ以上は何も語らずに馬小屋を出て行ってしまわれる。最後に仰った事の意味を聞けず、俺は馬のブローシユに残りの乾草を食わせた。」

「油断？」

「夜、再び川辺に向かうと既にレアが修練に勤しんでいた。良く手入れされたレイピアを振う度、宙に突き刺す度、反射された月光が川と地面にその軌跡を描く。」

「可笑しいと感じるのは、ある。けれど」

「目を逸らすことなく磨かれたであろう剣は尊敬できる人だ。軍人ではなく、貴族であり騎士として尊敬に値する。」

「どうもな」

「色んな理由が浮かんだけれど、結局目的は定まっていた。俺は彼女と友達になりたいのである。魂の死んだ嘘つきばかりが蔓延る宮殿の中で、唯一対等に剣を競える人と仲良くなりたいだけなのだ。」

「俺は片手で剣を抜いて川辺を駆け降りた。軽く大剣を振えば彼女は、彼は当たり前のようにそれを受け流してくれる。」

「空気の上に相手を描く等、寂しくはないのか？」

「今始めた所ですわ。それより約束の酒は持ってきたのでしょね？」

「酒瓶二つを芝生において剣を交わし始めた。鉄と鉄がぶつかり合う度に自分から何かが剥がれ落ちて行く。戦うのが楽しいのではない。競争と刃物だけが持つスリル」

に胸が踊るのだ。

「今日こそはあなたの剣を見切つて見せる！」

「でないとまた地面を這う事になりますわよ」

鋭い剣先が耳元を掠つた。鉄が空気を裂く音が服をはためかせる。突き刺されたレイピアを避けて手袋で払いのけ、たまには刀身の根本同士をぶつけては没常識な力比べをした。

「レア、その剣術はフランスのもの？」

「さて、剣なんて修練を重ねれば国等関係ないのではななくて？ ニコライの剣もそうでありましょう？」

大雨と曇りの日を除いて、俺達は毎日のように勝負を繰り返す。最初は宮殿内で起きた出来事を話っていたが、いつの間にか日頃の愚痴や故郷での出来事に至るまでの下らない雑談だけが行きかうようになっていた。

日が暮れば実力を競い合い、日曜が過ぎれば内面を語り合い、月を渡つては酒の趣味を擦り合わせ、季節の合間に思い出を共有する。そうやって新しい一年が出来上がつていった。

両方とも息が続かなくなつてしまえば酒を飲み、足りなければ宮殿の貯蔵庫から酒をかつぱらう。管理人にバレたらレアが、侍女にバレたら俺が誤魔化して噂にならぬように逃れた。対処した人が一番に口を付ける決まりである。

「今日のは当たりだレア。上物だぞ」

「飲みすぎですわニコライ！ そもそも一度に飲む量が多いんですから」

「別に良いだろう？」

「ワインを嗜む事もできぬのですか？ 繊細さが足りないという証拠です」

「そういうお前は夜会で殿方に話しかけられただけで固まるじゃないか。大胆さが足りない証拠だ」

「わたくしは別にそんな事ありませんけど！？」

「いやいやレア、気付いてないだけで全体的に動きが硬くなるんだよ。俺には見えている」

「そんな事ありませんわ！」

「いや」

「ありません！」

「わ、分かりましたよ。そう怒るなって」

嫌な時は嫌な顔で問い詰め、気分が良くなればゲラゲラと笑い声を出した。それができる場所が何よりも大切だった。

「今のは屈辱を感じました。発言を撤回させる為、剣で勝負してあげますわ！」

「カクカクした動きで勝てると思うな！」

俺がレアに対して今一度考える切っ掛けになったのは、そんなある日の出来事が原因だった。

「オリアアア！」

ウオツカの瓶をずらりと並べたカウンター席の後ろでは、数十人が互いを殴り合っていた。聞けば機嫌を悪そうにしていた男がいきなり隣テーブルに喧嘩を仕掛けたらしい。それが伝染して自然と十人を超える殴り合いが始まり、またそれを見る為に人が集まっている。中でいちやもんでもつける奴があれば再び喧嘩、その繰り返しだ。

「ここはいつも騒がしいな。何もなくて良いのかね首都警備軍の旦那」

「数人ぶつ倒れば席に戻つてくださる。ほっとけ」
幼馴染から酒に誘われて来てみればこの様である。し

かし治安維持が目的の軍人としては、わざわざ小競り合いに勤しむ気はないらしい。

「それよりこっちの話だキリルよ。最近どうもあつちこつち騒がしい。夜な夜な外部の者と接触している貴族がいるという噂もかなり広まっています」

心当たりが多すぎて思わず口に含んでいたビールを噴き出してしまふ所だった。

「貴族が何処に向こうと自由じゃないか？ 俺もこつやつて外出くらいするし」

「下町に遊びに来るくらいならば、の話だろ？ そうじゃなくて外国の人間と接触しているという話だ」

「まさかフロイセンの？」

「さてどうだろうな。としたら最悪の事態だろう」

オーストリアの領土を奪う為にフロイセンからふつかけた戦争は、もはやヨーロッパ全土を巻き込んだ状態にまで苛烈を極まっていた。イギリス、フランス、オーストリア、フロイセン、他諸国を始めた、我がロシアも昨年大小の戦闘を行っている。

「そもそもが、だ。陛下の命令で国境を封鎖している状態で宮殿内にスパイが紛れ込んでること自体が問題だ」

「首都の警備としては不安ってか？」

「もし外側からの密入国を見逃した等という話にでもなつてみる。責任問題からは免れられん」

現在も国境は特に男性の移動が厳しく制限されている状態だ。レアの父である毛皮商人もそのせいで入国が拒否されたと聞く。

（何にせよ周辺警備が厳しくなれば、レアとも会い難くなるか）

何より宮殿内には女帝陛下もいらつしやるのだ。軍としても、貴族としても、スパイが紛れ込んでいるかも知

れない状況は宜しくない。いつも配慮してもらっている恩に報いる為にも聞き流せる話ではないだろう。

「一応宮殿は俺の方でも見張ってみるとするよ」

奢られた酒を一気に飲み干してそう言うと、奴は笑顔一杯に抱きしめてきた。積もりに積もった不満で一杯なのは同じらしい。俺はそつとビールグラスで顔を押しつけてやる。

「それでこそだ！ やっぱ話を通じるじゃねえーか。他の貴族様は自分達の役割でもないとしている風潮でな。その癖宮殿内の警護は同じ貴族で固めているから話を通す術がなかったんだよ！」

「分かっているからくっ付く気持が悪い。何か掴んだら連絡をよこす」

月が昇って俺は馬小屋に隠れて様子を見ていた。相手が馬を持ち出すなら直ぐに追える。でなくとも馬小屋から見れば少なくとも誰が外へ出ていくのかくらいは把握できるとは思わない。

「宮殿からわざわざ下町に夜出かける貴族はそうないだろうからな」

俺は政治に参加していないからこそその特殊な場合だが、宮殿の敷地内には基本的に食べ物も酒も人もいる。貴族として外出する用事等殆どない。やっても領地に戻る時くらいは物だ。

「しかしスパイか」

フランスとは共同戦争の最中、つまり軍事的協力関係にある。しかしこれはフランスと完璧な面で軍事同盟関係を結んだとは言えない。あくまでフロイセンに対抗する為のオーストリアのマリア・テレジアとエカチエリーナ女帝陛下との協力関係だ。もしフランスからスパイを

仕込んでいて、それが外交トラブルにでもなった日にはレアも余り良い目線では見られないだろう。

剣に体重を任せたままは隅でうずくまって息を忍ばせていた。雨の音に紛れて誰かの足音が鳴らないかと耳を傾かせ、ただずっと待ち続ける。

そうしていると真夜中に誰かが馬小屋の扉を空けた。少し開いた扉からの月明かりでは誰なのかも分からないが、その人影は手慣れたように鞍と鎧を馬に付けて連れ出していく。

(馬も一切抵抗しないな)

どんな生き物でも慣れていない相手、慣れてない時間に動かされるのは厳しい。馬のように徹底的に人間に飼育されている動物は尚更だ。

「追うか」

俺は馬の走っていく方角を確かめながらサント・ピートルブルフの街並みを駆けて行った。女帝陛下のお住まいになっている冬宮殿を中心にして、放射線状の道は尾行には適している。

馬の脚を一定の距離をおいて追いついていくと宮殿の外、街の外れにまで人影は移動した。その内人の手が殆ど届いていない森の中へと入っていく。

若干速度を出しても三十分程の距離。歩いて往復だと二時間は掛かるだろう。夜中に軽く出かけられる距離ではない。

森の中、馬の足音を追っていった先には廃れた教会が一軒だけ建てられていた。手入れも行き届かずに森の中、石の壁には緑がつつたっている。

「綺麗な場所だが、どうやら誰かと待ち合わせしているようだな」

教会の外には手綱を結ばれたままの馬二匹がバケツの

水を舐めていた。馬に気付かれぬように裏に周って壁に耳を当てる。

中からは聴き慣れた声が本を読んでいた。まるで劇でもするかのようになりきって、大袈裟で面白く物語る。まるで子供におとぎ話を聞かせるような感情豊かな声、そこで俺はようやくその声の主が伯爵だと気付いた。

(こんな所で、何を？)

相手が気になって壊れた窓から少し覗くと伯爵と同じくらいの、パツと見た所五十後半そこらに見える婦人が一人肩を寄り添わせている。

(これは、ちょっと罪悪感を感じざるを得ないな)

気軽に覗いてはならぬ空間を見てしまった。そんな気がする。

何度も修繕しているのに清潔に維持している服装、それには見合わない高価なペンダント。婦人の方は農奴のように見えた。

「どうやら伯爵は白っぽいな。断言はできないけど」

楽し気な二人の声を耳に数時間と待っていると、その内雨も止んで婦人は軽く「ではまた気が向いたら来てくださいね」とだけ挨拶をして馬に乗って行ってしまふ。

俺もそろそろ戻ろうと考えていると伯爵様の方から裏手に歩いてきた。

「終わったぞキリル。監視お疲れ様だ」

「バレてましたか」

いつものような不愛想で無情な声で、諭すように俺の間違いを指摘する。

「せめて軍のお友達と連携する訳には行かなかったのか？ 体力は認めるが、街中で走って標的を追うのは良くないぞ」

「申し訳ございませんでした！」
伯爵様は手綱を俺に任せて鞍に跨った。

「あくまで個人的な興味ですが、あの方は何方でしょうか？」
「ただの農奴だ」

そう断言する。しかしその内聞かどうか迷っている事が気になってしまわれたか、また伯爵様の方から口を開く。

「暇つぶしだ」
「それは？」

「以前宮殿に向かう途中馬車が壊れてな。馬車を修理してくれた民家の娘が美人だったから相手にしてやってるだけだ」

「……それだけですか？」

「それだけだ」

そんな話は聞いた事がない。俺がこの宮殿に来て女帝陛下と伯爵様に仕えて十年だ。少なくともその間馬車の破損で何処かで足止めを喰らった等という話は聞かない。(一体何年相手にしてるんだこの人)

「農奴の娘等、綺麗でもないなら相手にしちゃいない」

伯爵様は宮殿に着くまでそれ以上何も語らなかつた。

「お前も随分と熱を上げているようではないか」

馬を休ませて馬具を片付けると伯爵様は突然俺が付けていた剣を抜いて剣身を確かめる。一度ひる返して月に照らしながら手入れをが行き届いているかをお確かめになった。

「そつちもバレていましたか」

「雨の日でも晴れの日でも雪の日でも、ほぼ毎日のように出入りしている。宮殿に住んでいる人間なら気付けぬ訳がない」

「それ程でしたか！？ 雨の日は、自重していましたが」
「陛下の侍女とその騎士に、別段禁止されている訳でもない手前言わんだけだ」
一年もやっていると当たり前な話ではある。けれど宮殿内の知り合いが無き過ぎて気付けなかつた。余りにも周りが見えていないのは直すべき悪い癖だろう。

「貴様も区切りくらいは付けておけ」

「いやいや、俺は伯爵様とあのお方のような仲では」

「言葉を選べ」

口を滑らしてしまったのか一瞬で俺の剣の先端が喉元に届く。

「いえ、伯爵様と同じでそんな深い関係ではないと申しますか」

「友達としてでも、いつか離れなくてはならない時に備えるという事だ。時が来てからしか行動できぬは愚者の証明よ。また任命書は出されていないが、まあ良いだろう」

何のことかと問い返す前に、伯爵様から剣を逆様に握って柄の方を俺に向けた。

「ニコライ・モリッツ・キリル、貴殿はヴィリム・ヴイリモヴィチ・フェルモル閣下率いるフロイセンへの攻勢に加わり、最前線でその役目を果せ。これは如何なる事態においても決して覆らぬ決定だ」

エリザヴェート陛下は芸術に、特に西ヨーロッパの服や演劇と夜会に興味がおありだった。病気を得ても尚今日のように演劇を鑑賞していらつしやる。

美しい情緒豊かなオーケストラの音楽と軍人を演じる主人公の歌声が轟く劇場内で、様々な貴族達が心酔して心奪われていた。士官生徒アカデミー出身のアレクサン

ドル・スマロコフの綴った悲劇には、軍人の抱く国への忠誠と愛が込められている。

女帝陛下も彼のフランスの情緒を落とし込んだ作品には目がなく、今も酔いしれた風に世界観に引つ張り込まれていた。

しかしそんな美しい世界で、俺は一人だけ頭の中で別の事を考えている。

(派兵か。俺は元が軍人だ。いつかは来ると思っていたが) 二一年間はそんな事考えもして来なかつた。以前であれば宮殿から抜け出せた事を喜びとするはずだが、何故か素直に受け入れる事ができない。心臓を掴まれたような息苦しさが拭えないのである。

(何故だ)

自問自答の最中でも、本当は原因に目星がついていた。以前までの俺は自分の事をただの父が爵位を守る用途で宮殿に送り込んだ代役くらいに思っていた。だからこそ死ぬ事は嫌だけれど怖くなかつた。戦争に向かって死んでも自分が失う物は何一つないという区切りが存在していたのであろう。

「でも」

始めて友と呼べる人ができた。一緒に酒を飲んで剣を交わして、互いの良さを認めて合わない部分を繋いで行ける人である。

「ならば俺はなんだ」

舞台の上で軍人が己の使命を語った。犠牲になるのは嫌いだけれど国の為に戦わざるを得ない運命を嘆く。しかしヒロインの愛はそんな彼に何よりも勇気を与えてくれた。悲劇を喜劇的に見せられるくらいに確かな希望となる。

しかし俺には何も無い。決められた使命もなく、成し

えたい目的もなく、騎士としての誇りもないではないか。もし女帝陛下が御隠れになれば、レアが国に帰れば、他人がいなくなったただけで俺には何も残らない。

「俺は……」

「ニコライ？」

気付けば演劇は既に終わっていた。呼び声によりやく正気に戻される。

「心に響く内容だったかな。珍しい事ではないか？」

「いえ、いや、色々と考えさせられる劇でした」

「其方にはそうであろう。さてそろそろ」

女帝陛下を部屋にお連れすると何かの手紙に目を通された。すると俺から予想もできなかった話題が陛下の口から零れる。

「レアとは上手くいつているのかね？」

「はい？」

「レア・ド・ボモンに関する話だ。まさか其方が知らぬとは言わせんぞ」

確かに陛下は現在政治から手を引かれている状態だ。けれどまさか一騎士と侍女の話がされるとは思わなかったのである。

「上手くの意味は分かり兼ねますが、宮に多少の混乱を起こした事については誠に申し訳ございません」

「夜会で使われる酒をそう何度も盗むでない。使用人も困る」

「申し訳ございません！」

言い訳の余地がない。正直行き過ぎたとは自覚していた。

「許す。何より其方とあの子は見ていた楽しい。喜劇のような、悲劇のような、さてどうなるやら」

「それはどういう」

呆けていた俺に女帝陛下から読んでいらつしやった手紙が手渡される。内容がはつきり見えるように広げて渡された手紙と陛下の尊顔の間を視線を行き来させていると、軽く首を縦に振られた。

「読むと良い。ここではなく其方の部屋でな。余は少し眠ろう」

「は、はい！ では失礼いたします！」

さつさと自分の部屋に戻って手紙に目を通すと額と背中から冷や汗が流れる。

「これは、密書？」

内容からしてフランスのルイ十五世からエリザヴェートル女帝陛下への密書だ。詳しくは今回のフロイセンからの攻勢に対する同盟に関わる文書である。

「フランスが我が国と正式に国交を結ぶのか」

俺なんかの下級貴族に何故このような文書を、そんな思いを抱いて読み進めると後半部にて大使に関する内容が記述されていた。確かに、そもそもフランスのルイ十五世からの手紙等、入国規制されている今現在どうやって陛下の元にまで届いたというのか。

一枚を捲って、一段下って、一文字を進ませる。そこには女装をした騎士デオン・ド・ボモンへの保護と大使館での就任が記されたあった。俺はそこでようやく女帝陛下の意図とお言葉の意味、そしてレアが今まで見せた態度に関する全てを理解する事が出来たのである。

「ただの使い捨ての札か。俺は」

——騎士達の夜会——

女帝陛下の趣味として女性は男性の服を、男性は女性の服を着て参加する仮装夜会が開かれた。俺は特別に

元々着ていた服でいる事を許されたまま参加する。

勿論の事ながらそんなに多くの、主要な貴族様方が皆参加されている訳ではない。そもそも夜会事態先代のピョートル皇帝様が開いて、五十年と少しを満たさないイベントである。

「それでも段々皆様も乗り気になってらつしやるようで」

「良き事よ。余も見ていて楽しい」

以前宮殿に始めて来た時は付き添いとして女帝陛下の踊りを拝見した事があった。そのお姿は美しく様々の方々の噂に上がった程である。

今までは結婚の申し込みを避けるべくしてきたが、どうしても今回ばかりは参加したかった。

陛下のお傍で彼女が来る事を待っていると、夜会の場に感嘆の声が上がる。最初は数人が無意識に漏らした音は、人波に乗って広がっていった。それはたった一人の男装から始まった物で、数十の視線の先には女帝の侍女が立っている。

（どんな姿であっても本当にお前は綺麗だな。いつも川辺で見る堂々とした振る舞いが嘘みたいだ）

男性用のワイシャツは真っ白く、喉にかけたレースを片方だけ結んで垂らした飾りジャボは彼女の透き通った肌によく似合っていた。しかし纏った紅葉色のコートと黒いズボンは小さな歩幅からは考えられないくらい派手でありながらもはねているとは感じさせない。

一步を歩く度に後ろに結んだ髪はチューリップで染めたようなくすんだ黄色が揺らぎ、その余りにも美しい姿に誰もが一度は目を奪われてしまう。

「では、今宵の夜会を始めるとしよう。皆楽しんでるのではないか」

女帝陛下のお言葉と共に金管オーケストラ奏でるポー

ランドの音楽、ポロネーズが宴場に満ちていった。人々はそれぞれ酒のグラスを傾かせて、壁際には自然と踊る為の空間が準備される。

レアの方に目を向けていると女帝陛下はそつと腕を掴んで彼女の方に押して下さった。

「余は少し座つていようぞ。其方が代わりに楽しんでおくれ。それとも命令でしか踊れぬか？」

「いえ、感謝いたします陛下」

彼女に手の甲の方を向けて右手を差し伸べる。すると彼女は少し微笑んで左手を伸ばした。四本の指が重なるようにして、離れない為に親指を相手の指に添える。

「レア殿、俺と一緒に踊ってくださりませんか？」

「良いですわよニコライ殿」

俺達はレアを右にしてポロネーズを踊る列に並んだ。

やがてゆつくりとしたテンポに合わせて男女ペアが並んで作つた列でゆつくりと会場内を歩きながら三歩進んで一度腰を少し落す。

「久しぶりですわね。最近来てくれないから一人ですつと練習していたのですよ？」

「色々あってな。すまん。代わりにここでは幾らでも酒飲んでいいからよ」

「ただ酒でいばらないで貰えますか？」

二列を作つて互いのペアですれ違つたり、女性役同士が合間で手を取り合つたり、ペアが手を繋いで作つたブリッジの下を他のペアが通過する事を繰り返す。

「お前とこんな風に踊る事になるなんてな」

「わたくしも意外に感じますわ。踊りはかなりぎこちないのですけれど」

「言つな。俺も自覚してる」

我々は決して男女で気軽に身体に触れる事はなく、た

だ手を合わせ、繋ぐだけで全ての動作をこなす事が重要だ。イエス・キリストの名の元に恥じるような真似は決してしちやいない。

曲が終わつて俺はビール一瓶を空けた。レアは伯爵から聞いた通り、静かな令嬢という風にワイングラスに傾かせる。

「本当に猫被つてるんだな。驚いた」

「場所と相手によつて対応を変える。人はそれを社会生活と呼ぶのですわよ？」

「始めてあつた人の酒を勝手に飲み干すのが社会生活か。ご立派ですな」

「少しのご愛嬌でしょう？」

「ん。まあ愛嬌はあつたな。とても、綺麗だった」

「何ですか？ 急に気持ち悪い」

二人で会話をしている周囲が物珍しい視線を送つてきた。どうも居心地が悪い。レアも少し張つていた声を潜ませる。

「少し風浴びるのに付き合つてくれね？」

「良いですわね。わたくしもちよつと酔いが回つてきた所ですわ」

「良いですわね」

宴会場を、冬の宮殿を後にして俺達はいつもの川辺に出た。暖かくなり始めた時期に一足先に冬眠から醒めた、ここにいきる様々な生命の音が芝生に満ちる。川の流れる音、風が花と草を撫でる音、宮殿から聞こえる音楽と人々の話し声。それ等を静かに浴びるのは心地が良い。

「レア酔いは、少し醒めたか？」

「ええ、正直余り酔つてもいませんでしたわ」

「そうか。良かった」

時間をおいて、俺は先に用意してあつた二本の剣を取

り出して片方を投げ渡した。こちらが剣を抜くと最初は疑問符を浮かべていた彼女も咄嗟にレイピアを抜き取る。「今日、ちよつと変ですわね。どうかしたのですか？」

「お前の名前はなんだ」

「何を」

笑つて誤魔化そうとするレアに軽く剣を振うと軽く弾き返された。

「もう一度問う。お前の名前はなんだ」

微笑んでいた表情から一気に酔いが醒める。剣先同士を当てたまま彼女は溜息混じりに自分の本名を口にする。

「デオン、デオン・ド・ボモン。やはり隠しきれない物なのですわね。見抜けたのはあの目つきの鋭い伯爵様く

らいのものだと腹を括つておりましたのに」

(伯爵も)存じだったか

案外高位の貴族達には当たり前なかも知れない。何も考えずに接していたのは俺のような何でもない、飾られた貴族くらいのものであるのかも知れない。

だからこそ、ここで引き下がる訳にはいかないのだ。

(俺が騎士であるが故に)

「デオン、お前は俺を騙していたのか。毎晩宮殿の外に出るのは、あくまで同性の騎士と戯れる為だったと。不

穏な噂を立てず、かつ工作も簡単にする為の隠れ蓑にしたのかと聞いているのだ！」

「はい。その通りでございますわ」

「何故だ」

「騎士としての、我が王からの任でしたから」

レアは清々しくそう言い放つた。自信に満ちた顔には

羞恥や遠慮はない。あるのは己が任された責務への、騎士としての使命感のみである。確かな目標と忠誠、そして

信念なくしてそのあり方は貰けない。

我々は決して男女で気軽に身体に触れる事はなく、た

「そうか」

同じ場所で彼女、いや彼が誰よりも美しくあり続けたのは、誰よりもはつきりとした騎士としての誇りを抱けたからだ。ドレスを着込んで、誰かを騙しても、魂だけは気高くあり続けたのだ。

俺も、そうありたかった。

「そういうお前と、お前の剣に惚れた。騎士として誇り高いお前のあり方に目を奪われていたんだ。それでもお前が俺を利用していただとすれば」

彼のような騎士に惚れたから。

「それがお前の任務だとするならば、俺は『騎士』として自分の失態と裏切りを放つてはおけぬ！ それが例え陛下と国が望まれた結果であつても、俺がスパイの隠れ蓑として使い捨てられるのが丁度良いような人間であつてもだ！」

今更ながら変わる決心がついた。この人の前だと変りたいと、そう確かに感じている。

「最後の決闘だデオン。この決闘、俺が勝てばフランスを捨て、このロシアで普通の男として俺と一生を過ごせ！」

「待つて、それというのは、つまり」

「婿として俺と結婚しろ。レア、俺を騙してスパイではなく、俺が憧れて愛した男となれ。デオン！」

そうすれば俺は、憧れの人と幸せに生きる妻と成れる。生きる目的を手に入れられる。

（俺は俺の生きる意味を作る為に、お前の騎士としてのあり方を挫く！）

デオンは最初頬を赤らませて剣先が揺れた。しかし直ぐに小さな笑みと共に腹の空気を吹いて笑い出す。

「ハアハアハアッ！ 剣先を向けてする告白など、わ

たくし聞いた事ありませんわ。でも、これが貴方様らしきなのですねニコライ。始めて知りましたわ」

「俺も始めて知ったから気にすんな」

不安定に揺れていた剣先は固定されたように安定し、彼はもうその姿勢を少しも崩す事がなかった。始めて

「我が友ニコライよ。それでも僕はフランスにこの身、

忠誠、全てを捧げたが故に！ 貴殿という誇り高き騎士をここでねじ伏せて見せようぞ！」

宮殿のシャンデリアと燭台から放たれる絢爛豪華な光が月光と入り混じり。川辺はいつにないくらいに明るくなり、見える全てが鮮明になったように感じた。

宮殿の宴会場では我が国ロシアの冷たい白い雪の大地を彩る新しい曲が始まる。

静かに始まる伴奏の管楽器に合わせて、互いに剣と剣をぶつけた。隙あれば、つけ入れるのであれば、と首元を狙って突くと知っていたと言わんばかりに払いのけて逆にレイピアを伸ばしてくる。一秒の半分の半分で迫ってくる剣先だったが、真っ直ぐな刃が狙う場所が心臓であるのを俺は気付いていた。肩間、首元、心臓、腹部、互いに確実に無力化できうる場所へと狙いを定め、しかし不思議なくらいに剣は服に掠りもしない。

「僕」といったのは始めてだなデオン」

「そういうニコライも自分の事を騎士だと自称したのは始めてではありませんか？」

「初めてだとも！」

三分の四拍子に合わせて高鳴る鼓動の歌に合わせて誘うように大振りして剣を振った。突かれようとも半分削ぎ落してやる気の大振りに乗るようにはあちらも思いっきりの斬撃を繰り出してくる。金管の音とは違ふ、重たい

鉄同士がぶつかり合う音が混じった。

一太刀交わす度に刃毀れしていく剣には目もやれず、俺はデオンだけを見つめる。彼が一步を下れば一步を詰め、懐に來れば一步を下つて、何度も彼が踏んだ草むらに残った足跡に靴を合わせた。

「実力を隠してましたわね？」

「お前も見違える程だぞ」

戯れるつもり等ない。それは冒瀆だ。だから殺してやろうと、殺されてやろうと剣を振っている。のにも関わらず中々に殺せない、殺されない。

互いの全てを知り尽くしていた。どのタイミングで剣を振るか、どんな場所を狙うか、呼吸の間隔までもが一寸の違いもなく合わさっている。

しかし一歩リードしていたのはこちらの方だった。剣を防ぐ瞬間に両手で剣を握るのではなく、左手でレイピアの護拳に指を引つ掻ける。力負けしたお陰でレイピアの刃が肩に食い込んだが、代わりに相手の側面を完全に無防備にできた。

「これは不味っ」

デオンは直ぐに重心を後ろに移動させて引こうとするがそうはいかない。即座に護拳をこちらに引つ張り、接近した肋骨へそのままの勢いを乗せて膝を叩き込んだ。息を吐いて苦しむ彼に最後の止めを、と首筋を目掛けて刺そうと腕を振う。

「クハアッ！」

「死にたくなければ負けを認めろデオン！」

「剣を振いながら言うと言得力がありません！」

しかし刃の先端が彼女の喉元に届く前に右腕が完全に動かなくなった。興奮し過ぎたせいで何が起こったかも分からない状態で右腕に目を向けると、いつの間にかレイピアが腕の深くまで刺さっている。自分の剣が引つ張

られている事を逆に利用して、剣先の焦点だけを当てたのだ。

傷から流れ出る血がシャツを濡らした事を確かめてようやく痛みを感じられた。引きちぎられそうな痛みは、だが決闘を終わらす程の物では決してない。

「アアアなめてんじやねえぞデメー！」

レイピアを離れた左手でデオンの首筋を掴んで締めると共に、動かない右腕を強引に押し込む。貫かれた骨に亀裂が走るのが分かった。それでもロングソードの剣先を刺し込むにはこれしかないと思っただけなのである。「俺はお前の事が好きなんだよ！ それでもお前の騎士道には罪悪感すらないのか！」

「別にあの時間が楽しくなかった訳ではありません。けれど任務は絶対なのです！」

進んでいた剣を彼もまた自分の右手で防いだ。勢いが死んだとは言え剣を素手で簡単に止められるはずもなく、掌から段々と刃が貫いていく。

「ふざけるな！ 俺の方を大事にしやがれ！」

「舌噛みますよー！」

横着していた時に一歩をリードしたのは彼の方だった。自分のレイピアを手放し、瞬時に腹を踵で蹴ってくる。

自分もバランスを欠いていたせいで転んでしまったが、流石の俺もそのまま首根っこを掴んではいられなかった。「ッ」

右手にレイピアが刺さって振う事も出来ない。そんな俺の状態を見過ぐす事なく、デオンがダメ元でも拳を振ってきた。しかしこっちは酒場で素手の戦いに成れている。咄嗟に拳を左手で受け止めて掴み、懐に潜り込んで腰に彼を乗せて投げた。

地面に背中から叩きつけられた彼は驚愕して口を開い

たまま俺と目を合わせる。倒れた彼の喉元に直接ロングソードを押し当てると、諦めたという風に全身の力を抜いた。彼の頬に俺の息が届く。

「あーあ最悪の形です。こんな風に負けるのだけは嫌だったのに」

「復讐としては、最高の形だ」

剣を更に降ろしてデオンを脅した。しかし開いた眼にその瞳には僅かな喜びすらも垣間見える。

「負けを認めるか？ 死なない唯一の方法だぞ」

「いいえ、責めて一息で殺してくださいニコライ。貴方になら殺されても良い」

「何故負けを認めない」

「貴方もそのつもりだったでしょう？ そしてこんな選択をする僕に憧れてくれたのでしょうか？ ならばこれ以上の死期もありません。本望です」

五体を広げて地面に背中を当てている彼と頭の上で睥睨したまま視線を通い合わせた。曲のクライマックスは過ぎ去り、雄大さを歌ったメロディーすらもう聞こえない。

静かな川の流れる音だけ、それだけが俺達を包み込む。「ちよつと熱くなり過ぎましたけど、全てを出し切らせて頂きました」

「俺もちよつと熱上げ過ぎた」

彼の喉から刃を離し、自分の腕に刺さっていたレイピアを抜き取った。途端に緊張が解けて凄まじい脱力感に襲われる。

「ニコライ！？」

デオンは心配そうにしてくれたが、既に肩から出た血が右手に溜まって、地面に染み込んでいく程だった。今から医者に縫って貰えば訳ないだろうが、それを受け入れたいとは思えない。

「君を手に住られないなら、君の手で居なくなりたい。君の思い出の中で『騎士』としていたい」

このまま生きていけば、俺は結構普通に生きられるのだという確信があった。目的も意味もなく、きつと流されるがままに生きていける確信が出来ってしまったのである。そんな安定した未来を思い描いたから恐ろしかった。今この時抱けた彼への思いも、騎士としてありたいという誇りも、何もかも忘れてしまふのが恐ろしかったのだ。

「デオンとして、レアとして俺を覚えていてくれる？」

「勿論家門を賭けて誓いましょう」

「レアとしてドレスも着ていてくれる？」

「お望みであらば」

結局彼を挫けなかった。俺は騎士としてのあり方を貫き通せる程の人間でもなかったという事だろう。

それでも

「ん。友達も悪くないね」

別れに涙が出そうなのこの感情を、到底俺は口に出す事ができなかった。伯爵がそうであったように、もしも感情を言葉にしよう物なら、今すぐ彼に飛び込んで抱きしめたくなってしまうから。

だから俺は脱力感に身を任せて瞼を降ろす。夜空が閉ざされる中でも数万回と心の中で繰り返される感情を、無理矢理言葉で押しとどめながら。

「悪くない」

— FINE —